變

18

徳川家康

続獅子の座の巻・朝露の巻

山岡荘八

講談社

徳川家康　第二巻　続獅子の座の巻　朝露の巻　昭和五六年一〇月二〇日　第三〇刷発行　著者　山岡荘八　発行者　三木章　印刷所　東洋印刷株式会社　製本所　藤沢製本株式会社　発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―一二　振替　東京八―三九三〇　電話　東京(九四五)一一一一(大代表)

©藤野稚子　一九六三　Printed in Japan

定価一八〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

0393-144329-2253 (5)　(文2)

徳川家康 2

続獅子の座の巻
朝露の巻

目次

続獅子の座の巻

雪月花　七

紅だれ　一八

枯野の賦　二七

那古野扇　三八

往く雁戻る雁　四九

孤児登城　七〇

相寄る者　八二

春におく霜　九四

花供養　一一五
朝露の巻
諫　死　一三一
雌伏の虎　一四三
狂い桜　一五九
初　恋　一七五
忍従無限　一八七
風　雲　一九五
歩速の諧調　二〇六
薄　陽　二一七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

不如帰　二二九
信長構図　二四〇
帰雁の宿　二五〇
闌鶯の城　二六一
乱世の相　二七二
水魚相会う　二八四
風雲うごく　二九五
流　星　三〇七
梅雨の道　三一七
弦月の声　三二八

雲を呼ぶ者　三四三
桶狭間前奏　三五五
龍虎　三六六
疾風の音　三七八
付録（参考地図及び諸家系譜）

装幀　稲垣行一郎
挿画　木下二介
箱裂地　麻地草花人家文様茶屋染
提供　山口勉
表紙金版　徳川家康直筆署名

徳川家康

2

続獅子の座の巻

朝露の巻

続獅子の座の巻

雪・月・花

一

「竹千代、元気か」
庭先から声をかけられて、小鳥の籠を無心にのぞきこんでいた竹千代は、むずかしい表情のまま顔をあげた。
信長が今日もまたもとどりを奇妙な茶筅に結い上げ、腰にまくわうりの袋を下げて立っていた。
すでに季節は夏に入って、椎の梢で灼けつくように油蟬が鳴いている。
「竹千代」
「うむ」
「おぬし、その小鳥遊びはやめたらどうじゃ」
竹千代はちらりと籠の中を見やった。
「なぜ？」と、視線を相手にすえた。
「また、竹千代のなぜが始まったな。おぬし、この信長の家来たちがおぬしのことを何と呼んでいるか知っているか」
竹千代は知欲に燃えた視線をそのまま、微かに首を振ってみせた。
「知るまい。岡崎の城なしッ子はな、籠の鳥とばかり遊んでいると申すぞ」
信長はそこでピョンと縁にとびあがり、股をひらいて釣鐘窓に腰かけた。
竹千代はその両脚についた泥を仔細にながめたあとで、
「竹千代は相撲はきらいじゃ」
と言い放った。
信長は苦笑した。苦笑しながら腰の袋をはずして、
「そのきらいな相撲に勝ってな、これ、この通り百姓どもから初瓜をもらって来たわ。おぬしもかじれ」
竹千代はほうり出された袋をまたしばらくながめていたが、やがてその中から、一番よい瓜を三つ選んだ。あとには小さなのが二つ残っただけ。
「おいおい、そんなにやるとは申さんぞ」

「でも、三つなければたべられぬ」
「なぜ？」と、こんどは信長だった。
「欲ばった小倅じゃぞ、おぬしは」
竹千代はそれには答えず、
「三之助――」と呼んで、三つの中のいちばん小さいのをポンとほうり、
「徳千代」と、次のをやって、自分はいちばん大きな瓜にがぶりと前歯を立てていった。
「頂け。あまいぞ」
「アッハッハッハ……」
信長は大声をあげて笑いだした。
「おぬしは油断のならぬ小倅じゃ。この信長が汗を流してかせいだ瓜をさっさと自分の家来どもに分けくさる。わしはこの小さいやつをたべるのか」
「その代り二つあるゆえ、よいであろう」
「あほうめ、小さい瓜二つより、いちばん大きなやつ一つの方がずっとうまいわ。それをちゃんと知っていくさる」
竹千代ははじめてニコリと笑って、うまそうに滴るしるをすすっていた。
「なあ竹千代」
「うん？」
「おぬしの奪られた城へな、こんど今川方の総大将、雪斎と申す生ぐさ坊主が入って来たぞ」
竹千代はちらりと眼をあげたが、またそのまま瓜をすすりつづける。
「それでな、この信長もいよいよ嫁御を迎えることになった。どうだ。おぬしまだ嫁はほしくないか」
竹千代はべつに返事はしなかった。

二

またひとしきり、縁では瓜をたべる音がつづいていった。
「竹千代」
「うん」
「おぬし瓜とこの信長とどちらが好きじゃ」
「両方とも」
「ハッハッハ、抜け目のないことを申す。だがな、おぬしも、もう少し経つと嫁御がほしくなってくるぞ」
「嫁御はどこからもらわれる？」
「美濃のな、斎藤道三と申す食わせ者の娘じゃ」
「斎藤道三は食わせ者か」
「おお、そなたを年取らせたようなずるい奴じゃ」
「竹千代はずるくはない。で、嫁御はいくつじゃ」
「十八じゃ」
「ふーん」と竹千代は首をかしげて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「信長どのは？」
「おれか、おれは十五だ」
「ふーん」と、また竹千代は首をかしげた。
「嫁御は、年上の女子で、食わせ者の娘がよいか？」
「な……な……なにッ！」
信長は瓜のしッぽをパッと口から吐き出してびっくりしたように竹千代を見直したが、やがてその無心にたずねる眼に合って、
「アッハッハッハ。こりゃおかしい」
と、腹をおさえて笑いくずれた。
「そうじゃそうじゃ。嫁御はな、食わせ者の娘がよい。そなたも大きゅうなったら食わせ者の娘をめとれ」
「うん。それで婚礼はいつなされる」
「婚礼は今日じゃ。これからじゃ」
「ふーん」
「それでな、小手調べに津島の祭礼へ出ていって、思いきり百姓どもを投げとばして来たところじゃ」
「すると……すると、嫁御は投げとばすものか」
信長はまたあきれたように竹千代を見直した。
「竹千代、おれが竹千代を好きなわけがわかったよ。そうじゃ、おぬしのいうとおりじゃ。嫁御などと申す者は投げとばすものじゃ」
「ふーん」
「投げとばさねば投げとばされる」
「そんなに強いものか」
「強いとも、食わせ者の娘だからな。もっとも、こちらも強いな。おぬしはちかごろめっきり大人になったゆえ分るであろう。今川家の総大将、雪斎禅師がおぬしの岡崎城に入ったということは、織田家との間に、いよいよ大戦が始まるということじゃ。その時に美濃からも攻められてはたまるまい。そこで、こちらも攻めさせぬように嫁御を預っておこうというのだ」
竹千代は三之助の差出す布で両手をふきながらじっと信長の口もとを見つめていたが、やがて大きくうなずくと、何を思ったのか、小鳥の籠を引きよせてその口を開いてやった。
「どうするのだ、竹千代？」
「にがしてやる」と、竹千代はいった。
「小鳥遊びはやさしすぎる。竹千代は籠の鳥ではない。竹千代は、父がなくても、城がなくても大将じゃ」
信長はポンとひざをたたいて、また大きく笑い出した。

三

世の中にうまが合うという言葉がある。信長と竹千代が

それであった。
用心ぶかく人をそらさぬ利発さをもっている竹千代は、時に臆病にさえ見えながら、そのくせときどき鋭いひらめきをその質問に浴びせて来る。
用心ぶかさは父広忠の死を聞かされて一層つのったようであったが、たくましい覇気がそのために消え失せているのではなかった。
感情はいつも表に出さなかったが、城なしと呼ばれ、籠の鳥と呼ばれるたびに、その眼に猛々しい光りが宿った。それが今日は珍しく言葉になって出たのである。
「そうか。城がなくても、父がなくても大将か」
信長がもう一度楽しそうに笑ったとき、籠の目白はパッと外へ飛び立った。
信長はそのゆくえを眼で追ったが、竹千代は見なかった。彼の小さな脳裏に、わが城へ今川方の総大将が入って来て、やがて織田勢との間に一大決戦が開かれるであろうといわれたその一言が、大きな衝動を与えていたのに違いない。
彼は、眼の前へ無作法にひろげられた、汚れた信長の両ずねをにらんでいた。色が白くて毛の少ない、そのくせ隆々とした筋肉の信長の脚であった。
相撲もつよい。馬は上手。川干しと鷹狩りと盆踊りと水泳ぎで鍛えているばかりでなく、弓は市川大介という達人に、兵法は平田三位に、そして新しく鉄砲というふしぎな武器の使い方は橋本一把について習っているという……そのうわさを聞くたびに竹千代の小さい胸は熱くなって波立っていたのである。
（負けるものか！）
気魄は表に出さないだけにいよいよ内に燃えていたし、三之助相手に、時々庭で竹切れを振るときは相手が泣き出すまでやめないほどのねばりも見せた。
「竹千代」と信長はまた呼んだ。
「うん」
「おぬしが大将であることはな、この信長がいちばんよく知っている。信長も大将じゃ」
「うん」
「それでおぬし、この信長の婚礼に何をくれる。何か祝え」
「うん」
竹千代はそっとあたりを見まわした。寒暑の衣類まで生母の於大の方からひそかに仕送られている竹千代には、贈るべき何物もないのを信長の方がよく知っている。知っていながらからかってゆくのは、この小倅が、何と答えるかが信長にとっても面白いからであった。
「三之助」と竹千代は庭をゆびさした。

「あの竿、あれは物干竿ではないか」
「いいや」竹千代は首を振った。
「あれは槍じゃ。あれは長い長い槍じゃ」
「なにッ、あれが槍じゃと……」
竹千代はむっつりとした表情でうなずいた。
あるいは怒っているのかも知れないと信長は思った。
「あれより他に持たせられなかった。竹千代が大切な槍じゃ。あれを信長どのに進ぜよう」
「ほほう」
「その代り、お礼に一頭馬がほしい！　大将には馬がいるのじゃ。馬を下され」
ふいに灼けつくような眼をしてせがまれ、信長は眼を丸くして思わずうなった。

四

「あの槍を祝いにくれて、返礼に馬をせしめようというのか竹千代」
竹千代はうなずく代りにまたひとひざ信長にすり寄った。
「馬を下され。一頭でよい！」
「一頭でよいと……」
「うん、二頭ほしいところじゃが、一頭でよい」
信長はしばらくあきれたように竹千代を見つめていたが、やがてまたはじけるように笑い出した。
「抜け目のない小倅め。この信長の気性をのみこんでゆすりくさる。負けたわおぬしに。よしよし一頭だけじゃぞ」
「お礼を……ありがとう」
竹千代はきまじめに頭を下げた。
そこへ天野三之助がうやうやしく物干竿をささげて来た。
「わが君よりのお祝いでござりまする」
「うん」といって信長はその竿を受取り、笑いながら三之助の胸元にぴたりとそれを突きつけた。
「これを槍じゃといいくるめる。この二間以上もある物干竿を……」
いいかけて、ふと信長の眉がしまった。
「三之助」
「はい」
「そなたその太刀を抜いて、この信長にかかってみよ。遠慮はいらぬぞ」
「はい」
三之助はつかつかと縁にもどって刀を取って来た。そしてそれをすらりと抜くと、小さな足を大きくひらいて物干竿の向うに立った。

「それ、斬って参れ」
信長は窓に腰かけたままだった。ぴたりと竿を水平に構えて、三之助のまわる方向へジリジリと竿を移した。
「えっ！」三之助が気負った声で太刀を振りおろした。信長とは程遠い位置で、それは竿に挑むかたちになる。信長はそれを黙ってパチンと切りおとさせた。
槍を手許に引く代りにそのまま向うへ突いて出ると、切られた竿は三之助の胸元へハッシと食い入る理窟であった。
切った三之助が「あ――」とうしろへ飛びすさるのと、信長ががらりと竿をほうりだすのと一緒であった。
「竹千代、もらったぞ！」
と、信長は立ちあがった。
「なるほどこれは実戦の武器になる。手槍でのうて、二間柄の槍隊を作ってみよう。馬は引受けた。また会おうぞ」
来る時も唐突ならば、帰りもまた疾風に似ていた。例の竿を投げすてたまま信長はパッと庭に飛びおりると、あとをも見ずに自分の乗馬に近づいた。
逞しい連銭葦毛の逸物だった。その手綱を椎の幹から解くより早く、ひらりと信長はまたがった。もううしろの竹千代も意識にないのに違いない。鷹のような眼をすえて、
「そうだ、二間柄の槍隊を……」
そうつぶやくとビシッと馬に鞭をくれた。
竹千代はそれを縁からおりて見送った。依然感情は顔にない。が、彼の幼い眼は、焼けつくように信長の乗馬姿にそそがれている。
「馬が出来た……馬が出来た……」
彼は同じことを二度小さく口の中でささやいた。

五

那古野城内では一昨日この城に到着した美濃の斎藤道三が娘、濃姫が、媒酌人でもあり、親代りにもなっている平手中務大輔政秀夫婦に付きそわれて、いま大広間へ通ったところであった。
「若はおもどりなされたかな」
と平手政秀は、出迎えた四家老の一人内藤勝助に声をかけた。
「おもどりなされて、いま、しきりに長い竿を振ってござったが」
政秀はうなずいて、
「やれやれ、それでよかった。嫁御寮一人の婚礼になってはと案じていたが……まず安心」
それから濃姫をふり返って、
「若は、少しばかり変ってござる。些少のことにはお驚き

ないようにな」
濃姫はたよりなげな眼をあげてうなずいた。
年は十八歳。斎藤道三はこの姫の才気をこよなく愛していたのだが、こんどの婚礼にはまるで他人のように冷淡だった。
自分でわざわざ送って来れる時節ではなかったが、重臣一人つけてよこさず、両家のためにと使いに立った平手政秀に、
「――すべておことにお任せ申そう。わしと織田家の間柄ゆえ」
戦って戦って、戦いつづけて来た好敵手の手にはじめから娘一人を捨ててかかる口ぶりだった。それだけに、生れた城を出るときから濃姫のそばには他人ばかりであった。ただ三人の侍女だけが心のたよりで、自分よりも三つ年下の「那古野のうつけ者」に嫁ぐ覚悟をしなければならなかったのだ。
「さ、こうおいでなされ」
信長の居間は京風に改築されていたが、本丸の大広間はいかにも古風な岩乗一方の木組みであった。
その正面に、白あやの小袖をまとい、波打つ胸をおさえて坐ると、思わず涙が出そうになった。
美濃まで聞えた那古野の大うつけ者。まだ見ぬ自分の婿のうわさからは、美しい幻想はわきようがなかった。
「――とにかくとほうもない大馬鹿者だそうじゃ。嫁いでいったらの、その大馬鹿者の性根をはっきり見究めさっしゃい」
父の道三は濃姫にこの縁談を承知させるとき、歯に衣をきせぬいい方で、
「――しかし、どこかに見どころのある馬鹿であろうよ。でなければ織田信秀が、まさか後継にもすえまいでな。わしはおぬしとよい取組みと思うのだが」
道三もむろん信長に会ってはいない。その言葉を要約すれば、
(そなたは美濃の間者として那古野へ嫁いで行くのだぞ)
そうさとしているのだと、姫にははっきり分っていた。
「これッ」
いきなり耳のそばで声をかけられて、小さく坐っていた濃姫はハッとしてその声の主を仰いだ。
「おぬしが美濃の濃姫か」
無礼な奴。いったいこれは何者であろう？　六尺近い大男が、よごれた脛をむき出して、いきなり姫の前にどっかと坐ったのだ。
「なぜ返事をせぬ。まさかおぬし唖娘ではあるまいな」
それが信長の濃姫にかけた最初の言葉であった。

六

濃姫がけわしい眼をして信長を見つめていると、
「若でござる。信長さまでござる」
と、政秀がささやいた。
濃姫の表情に、さっと狼狽のいろが動いた。体を少しなめにひいて、驚きと警戒とが思わず全身ににじんでいった。
「はッはッはッは」と信長は笑った。
「おぬしの体には羞恥が見えぬ。この信長の寝首をかきに参って、肚の底を見やぶられたような眼のいろじゃ」
「これッ若！　お言葉が……」
と、政秀がたしなめたが、そんなことで言葉をつつしむ信長ではなかった。信長はぐいっとひとひざすすめて、
「おぬしに、この信長の守りが一生出来るか？」
濃姫はその眼をきっと見返して、
「濃姫は子守りに来たのではござりませぬ」
と、いい返した。
「子守りでのうて何しに来たのじゃ。ままごとに参ったのか」
「信長さまの正室に」
「小賢しいぞ。正室とは何をするのじゃ」
「城の奥の支配一切、他人に手は焼かせませぬ」
「ほほう。これは大した度胸じゃ」
信長はニヤリと笑って、
「年を食ってござるだけにいうことが凝っている」
「これ若ッ！」と、また政秀がたしなめたが、信長は毒舌をやめなかった。
「よくよく親父にいいつけられて来たと見える。が、奥はおぬしの思いのままになるであろうが、この信長はちと違うぞ」
濃姫の眼にはうっすらと涙がにじんだ。だが、これもさすがに道三が、身内もつけずにこの城へ送りこんで来る姫ほどあって、負けてはいなかった。
「そのこともよく父から承っておりまする」
「どう承った？　それを聞こう」
「なみなみならぬうつけ者ゆえ、そなたとはよい相手であろうと承りました」
「なにッ」
きらりと鋭く信長の眼がすさんだ。
「するとおぬしもうつけ者かッ。おれに負けぬうつけ者か」
「はい。うつけ者同士。美濃と尾張の」
「わッはッはッは……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com